

彙 報

次に前者の土器は勿論成形に轆轤を使用しない厚手の廣口鉢形のものであるが彩文である點が興味を引く。文様は格子狀紋或は渦紋瓜形等を主として居り、又十文字の如く記號的な間刻線をこの土器片に見るのは、石片或は岩石上に刻されたものとの連系の考へられる點で注意される。

以上は本報告の概要であるが、さてこの三遺跡に於いて土器を伴はないで、剝片石器・骨器・埋葬人骨を有する貝塚の性格とアリアンサのある地域で見た土器類とが問題となるであらう。しかし發掘者は其等の年代乃至文化の性格に就いては語つてはゐないが前者は吾々をして初期新石器文化乃至中期石器的な様相を思ひ浮べしむるものであり、後者はインカ文化以前の系列を聯想さすのであらう。

一體南米の大陸文化はその地名の示す如く、又其の現住民の三分の一がポルトガル・スペイン人等の歐洲人である事等から十六世紀中葉以降のスペインの侵入が過去のこの地の文化を如何に味氣なく抹殺して了まつたかと云ふてよい。併し外形的に抹殺され切れないで残つてゐる舊文化の斷片が所々に存在してゐる。チチカカ湖を中心としたインカの文明もさる事乍ら、少くも今の吾々には北端ヴェネゼラのマラカイボ湖畔に残した湖上住居の文化と南パタゴニア平原に残された所謂 Patagon の文化或ひは *Patagon del Fuego* の土人の過去及びその生活様式とは原始林の存在と共に遙かに南米への憧憬的となつてゐる。而して今この書に依つて我が海外同胞の埋もれたものに對する探索の姿が、その上にまた一つの新しい興味を興へて呉れたことを感謝したい。(本文三五頁、英文概要五頁、圖版五六葉、東京人類學會發行、定價壹圓五拾錢)(藤岡謙二郎)

史 學 研 究 會

例會 五月六日(土)午後一時三十分より文學部陳列館第一教室に於いて本學年度最初の例會を開き、左記の如き講演を行ひ、たほそれに關聯して教室の一部に大津京陞並に崇禪寺陞の出土品寫眞、實測圖等を展觀し一般の觀覽に供した。學外より多數の來會者あり盛況を呈した。

大津京址最近の發掘調査に就いて 柴田 實氏

(その概要は本誌前號並に前々號發掘欄所載の記事と重複するを以て省略する)

唐井五代に於ける佛教信仰を中心とする社邑に就いて 那波利貞氏

(本誌掲載に付、梗概を省略する)

國 史 學 會 大 會

國史科大學院學生を中心とする國史學會では恒例の春季大會を六月九日(土)午後一時三十分より樂友會館講堂に於いて開催、左の如き講演を行ひ五時過ぎ散會した。

多羅尾氏に就いて 平山敏治郎氏

一つの時代の過渡期に於いて、前代の社會的制度、身分に保障され、支持されてゐた人人が、その背後にある權力を失ひ、その

依つて立つ地盤を覆された時、新しく展開して行く時代に如何に處したか。この事實に就いて、近江甲賀郡信樂庄内の多羅尾を本據とする多羅尾氏を問題として取上げ、その家が中世の庄園制が崩壊し知行制の確立される過程にあつて、名主・庄園代官・土豪小領主・知行主と變態して行く事情を、後法興院記その他近衛家の記録・文書、又は家譜等によつて叙述し、更にかゝる社會狀勢の推移に伴ふ社會的な身分、地位の變化、土地領有の形態の變遷にも拘らず、一貫して苗字の地多羅尾を中心として替ることなく家名を相續した事實に注目し、この事から或いは知行地を離れて城下に居住し、或いは本貫地以外に封ぜられた多くの徳川時代の武士とは異なる性格を、この家が保有してゐたであらうと考へ、延いては過渡期を通じて二つの時代に互つて、村落生活に如何なる變化が起るかに及び、宮座の問題を擧出して、現存する記録によつて、領主たる多羅尾氏が、多羅尾村の鎮守神を祭る精禰に於いて、支配下の農民と本質的に何等異るところなきを指摘し、それがこの家の古くから村の住人であつた傳統に基くと解釋して、歴史的な時代の推移に伴ふ社會制度、身分の變化が村落居住者の生活内容に及ぼす力に限度のあることを認めようとした。

山片子蘭について

水野恭一郎氏

通稱を升屋小右衛門と言つた大阪の豪商山片子蘭(號蟠桃、文政四年歿)は、商人としては、海保青陵をして大家傑也と言はしめた程の秀れた才幹ある人であつたが、同時に又、儒學を申井竹山・履軒に學び、天文・地理學を麻田剛立に學んだ彼は、江戸時

代後期に於ける注目すべき思想家であつたとして、子蘭がその著「夢の代」に於て極端なる現實主義と合理主義とを以て佛教及び神道・國學を批判し、更に儒學に對してもその形式化と世俗との游離を難じ、五行災異の説の觀念論的神祕性を排撃し、遂に無神論にまで到達したことをのべ、子蘭のかゝる極端なる現實主義と合理主義は、近世儒學が本來そのうちにもつてゐた所の精神の極端に發展せしめられたものと考へ得ると共に、彼の洋學の攝取による自然科学的世界觀が大いにその基盤をなしてゐるとして子蘭の洋學的知識と、彼が如何に西洋の學問の優越性を認め其の窮理・實證の精神と實用的な立場とを支持してゐたかを述べ、子蘭のうちに見られるかゝる合理主義的・實證主義的精神と現世的・實用主義的なる傾向とは、江戸時代後期の社會殊に市民社會のうちに漸次高められつゝあつた進歩的な一つの大きな流であり、それはその根底に於て封建制度否定的なるものを胎んでゐたとした。而も子蘭に於ては、かゝる進歩性にも拘らず、それは遂に封建的秩序そのものに對する批判とはなり得ず却て封建制度を禮讚しそれに安住して居り、既成神道や佛教・儒學に對する彼の鋭い批判を思ふ時こゝに著しい矛盾を感じるのであるが、かゝる妥協性は當時の市民社會が一面に於て持つた性格であり、子蘭の思想のうちにあらはれたこの矛盾性は、同時に江戸時代後期の市民社會のもつ様相であつたと論じた。

史料としての源氏物語について

島 道 雄氏

山田孝雄博士は源氏物語中の音楽の記事よりして、この物語の

描く世界はその著作された寛弘年間の宮廷生活に非ずして延喜天

曆頃のそれであると主張される。他の記事と考へ合せて延喜時代

とは思はれぬが天曆頃の風物が描寫されてゐる事は事實である。故にこの物語が從來寛弘頃の風俗學藝等を知るための史料文獻として用ひられた事は當を得ぬが、しかしその故に源氏物語は天曆時代のための史料としては危険のないものだが寛弘時代のための史料とはなり得ないものであると言ふ事は許されない。盤卷に見られる如き文藝論を持つ作者のこの物語中に含まれる貴族生活の情景の描寫を或時代のその客觀的記錄と考へる事は、物語中の事件を歴史的事實と考へる事と同様に誤りである。所詮こゝには寛弘時代人の見た天曆時代らしいものが示されるにすぎず、それが史料たり得る事も他の文獻史料の補助たるに止り、しかもこの場合源氏物語は一の文獻として遇され文藝作品としての本質的なものは看却されてゐる。

これに反して、例へば音楽の記事が人物の性格表現に密接に關係づけられてゐる事に注目してその意味を考へる等、この作品のもつ文藝様式の意味を考へる事により吾人はこの作者に於ける文藝精神の働き方を知り得、それを通して時代精神にまで到達し得る。この場合源氏物語は寛弘時代研究のための有力な根本史料となり、加之文藝作品としての本質的なものは見失はれてゐない。

一般に藝術作品がそれに描かれた物に關して史料とされ易いが、その描かれ方の側より史料とされる場合が第一義的な本質的なものである事は忘れられてはならぬ。

經覺畫連歌新式に就いて

岡見正雄氏

從來連歌新式として知られたものは良基が救濟と圖つて制定した應安新式そのものでなく、後の増補、即ち兼良の今案や牡丹花宵柏の手が加つて居る事は既に屢々言はれ、従つて原の應安新式への還元作用が研究者に依つてなされて來た。しかるに圖らずも、九條經教の息で興福寺別當として重きをなした後五大院殿經覺大僧正自筆の連歌新式が存し、それに依り應安新式の原型が明瞭となつた。この連歌新式に就いては、昭和十三年秋、京大で二學期の御講議の爲に入浴された能勢朝次先生の御教示によつて、長谷寺に應安新式の原型を知るに足る應仁項の連歌新式の存在を知つたのであるが、その御話を承つた際、私の腦裏にひらめいたのは、經覺の筆のものでなからうかといふ事であつた。それは數年前、私が内閣文庫で經覺私要抄、即ち安位寺殿記の原本をあはたゞしく通讀して居る際に、經覺が興福寺支配下の長谷寺の爲に連歌新式を書寫した記事を見——これは大日本史料にも見えるが——又忘れようとしても忘れぬ位、連歌新式連歌新式と大きな字で落書してある所が別にあつたからである。そして、長谷寺に行き、その連歌新式を調査して見ると、果して興福寺の別當經覺の自筆であつたのは不思議な一座の縁であつた。何となれば、その連歌新式には

此新式事爲滿山所望由傳執行弘賢申之間云不堪云老眼雖可在子細且恐鎮守聖廟之冥陞且勵大聖滿仰之老心所書能也應仁二季淨雲老翁(花押)七十四歲



尾末式新歌連筆覺經

の奥書があるのである。そして、安位寺殿記には私のノートから引くと、次の様な記述が正しく存する。即ち

次連歌新式事可書賜之由所望唐紙二枚賜之又自公方有基法橋所三社託宣圓頓寫所望共以可書遣之由可返事旨仰付畑經胤了
(應仁二年二月十六日條)

一自長谷寺中連歌新式書之但至今加沙汰之間今日不書終之(同年五月十六日條)

長谷新式今日書終了爲老體者以□大儀也然而法樂事敬神身也□一山論儀申之間老屈ヲ不顧沙汰遣了奥書云此新式事爲滿山所望之由傳執行弘賢申給之間云不堪云老眼雖可在子細且恐鎮守聖廟之冥睽且勵大聖渴仰之老心所書罷了 應仁二 五月十八日 浮雲老翁判七十四歳(同年五月十七日條)

長谷寺へ進代宮了以次連歌新式可遣之由仰畑經胤了返答云未代可爲當寺重寶之由悅賜了(同年五月十八日條)

一長谷寺執行給狀先日畏存候トテ楹一双麵十五束貳百疋進之祝著之由令返答旨仰付畑經胤了執行弘賢書狀也(同年五月廿六日條)

とあり、經覺が長谷寺の爲に連歌新式を書寫した事情も判り、日記にいふ奥書は後記憶に依つて書いた爲らしく、原連歌新式と比べると稍少異があるが、この原物は、表装共に縦六尺三寸餘横二尺餘の四幅から成り、字體花押等から判じて經覺の筆である事は疑ひの無い立派なものである。これが經覺の筆である事も興味を引くが、應安新式と新式追加條々、又追加、新式今案事を區別して居る爲、應安新式の原型か之處に判明したといふ點で、連歌研究者にとつては此上もなくありがたい資料である。(以上講演の一

部) (猶この本文内容は國文學關係の雜誌に、應安新式の原型を知り得る他の運歐新式の古本と共に近々發表する事にして、從來應安新式が運歐初學抄を通じて以外に知り様がなかつたが、正確に知り得る爲に、一應簡單に學界に報告させていたゞく事とする。)

祭に就いて

高谷重夫氏

祭の意義に就いては從來種々の説が行はれ徳川時代の學者は、語源的研究によつて解説せんとし又近代の神道學者も亦之等の説をうけてゐる。之に反して民俗的研究は現在體驗せられる祭の觀察より始つたが、その説の多くは、祭の行事は何等かの實用的效果をもたらさんとする現實的行爲であると云ふにあつた。しかし我々は、人々が如何してかゝる効果を期待し得たかを知らねばならないし、亦一の行事が種々なる効果を期待して行はれてゐる場合、之を一方にのみ決定する事は正しくないであらう。たとへば武射の神事は慶除け・年占・疫病除け等多くの目的の爲に行はれるし、更に雨乞と云ふ一の目的の爲に種々の行事が行はれ、しかもそれ等の行事は又夫々他の方面にも用ひられてゐるのである。隨つて我々は之等の目的の背後にあつて、祭の眞の本質、不動の社會的意義のあるべきを考へねばならない。

その事を知る爲に兵庫縣下の頭神事に就いて考へて見たい。此祭は兵庫縣に於いて、最も分布廣く、亦他の祭と異り有格社のみならず、無格社の如きものに於いても行はれてゐるから少くとも兵庫縣下に於いては此祭を見る事によつて、祭の意義を知る事が出来るであらう。

頭神事は近江の宮座と頗る類似し、事實、座や椀を形成してゐるものもあるが多くは村落共同體たる小字全體が之に参加する。而して、頭人たるものには第一に當才又は三才の小兒、全部が撰ばれる事多く、之を、初子祭・初宮式・初宮參と云ひ、又三つ頭、花の頭・鏡饗等と稱する事もある。頭人は社頭に參詣し御幣を戴き、一般に酒食を饗するものであつて、それによつて、共同體の一員たる事を承認せられる。即ち、氏子入の行事である。此外、十四五才の成年期に達したる者の頭人となる事も、同様に、入社式たる意義をもつてゐる。亦、氏子が順番又は神籤によつて頭人となる場合も、それが多く一生一度の大役であり、何等かの意味に於て、一段と神に近い氏子たる事を社會に承認せられる事等よりして同様の意義をもつものであると思はれる。社會がその新しい成員を自らの結合に加へる方法として行はれるのは、共同飲食、所謂直會である。しかも、その作法たる三獻の盃、其他、又、新酒・神饗の調理と材料には夫々の傳統と歴史がある。頭祭は之を年毎に繰返へす事によつて年々新な成員を承認參加させるだけでなく、社會自らの歴史と傳統に結び附く事によつて、その統一を新にするものであると云ふ事が出来る。更に此外の行事もその神話を保持し、又頭株たる家は祭神と結びついた自家の神話を新しく意識する事によつて、自らの階級とその階級の統一を固くする。

祭に關するかゝる考へ方は、デユルケム學說の輸入以來度々説かれた所であるが私の興味は、主として我國に於いて如何にして、それが實證されるかにあつた、而してかゝる考察態度よりし

て、從來の民俗觀察の方法が如何なる點で缺陷をもつてゐたかを考へんとしたのである。

近世思想に就ての一私考

前田 一良氏

(近く全文掲載の豫定につき梗概を略す)

上代墓制に關する一考察

梅原末治氏

我が上代の古墳の内部構造に就いては今から三十年近く前に喜田博士に依つて堅穴式石室と横穴式石室との二つの著しいものがあることが説かれ其の前者を以て古式墳の代表的な内容とせられたのであつたが、其の後其の鏡を藏する古墳の調べから古式墳に種々の構造の類の存在が別に考へられる様になつて來た。處が近年各地の古墳調査が精細に行はれ出した結果是等のうちから堅穴式石室と對立する著し内部構造の存在が新たに強く意識されることになつた。それは細長木製の刳舟乃至それを粘土で模して作つた一類であり、更に是等の外部の被覆として、細長い堅穴を營造すると云ふ一連の形式である。

從來知られた刳竹石槨や舟形石槨またそれと連系のあることが考へられる。此の類はその内容からしても、時代の遡るものであるが此の如き舟形槨は大陸に類の例を見ないので、こゝに大陸文化が波及して古墳を營む様になつた當初の我が固有なもの、葬法の上に示現された姿が見られるのではなからぬと思はれ、それは彼の外形に於ける前方後内なる特殊の形と相表裏する。古代に於ける舟葬は古傳にも傳へられる處、而してそれは四圍が海でめぐらされた我が國の地理的環境と併せ考へて興味が多い。遺跡の調査

からこゝに云ふ歸結を得たので此の機會に大要を述べた次第である。

讀史會

新會員歡迎會 五月三日(水)午後六時より南禪寺天授庵書院に於て開催、新會員(二回生)十六名を中心に西田教授、藤助教授、牧野、柴田、東伏見各講師以下大學院學生並に學生等四十餘名出席、山門前に於いて記念撮影の後、夕食を共にし、各自自己紹介を試みて和やかな一夕を過した。

例會 六月二十一日(水)曜日午後六時半より樂友會館第一號室に、例會を開催。來會者は西田、藤、牧野、柴田、東伏見の諸先生を初め、四十九名。左の演題に依つてお話があつた。

- 一、宇佐宮託宣集讀後感 三回生 横田健一君
- 一、藤原時代貴族の生活精神 三回生 兒玉重雄君
- 一、中世に於ける家名尊重の思想 福尾猛市郎氏
- 一、我國今日の政治形態に就いて 牧健二先生

終つて、西田先生から含蓄深い感想の御言葉を戴き、會を閉ぢたのは十一時にも近かつた。

民俗學會

例會 五月十八日(木)午後六時三十分より樂友會館に於いて開催、西田教授、牧野、柴田兩講師以下學生二十餘名出席、左の如き談話があり、尚、三河鳳來寺の田樂、陸中毛越寺の延年の映畫

を鑑賞した。

諸國風俗問狀答に就いて

平山敏治郎氏

わが國近世の封建社會の中に於いて新に興り來つた學問的意識の中には、早くから民俗學的なものが多分に含まれてゐたことを、嬉遊笑覽その他の類書によつて注意し、その一つとして屋代弘賢の試みた諸國風俗問狀なるものの有する學問的意味を説き、それに對する答の今日までに知られてゐるもの秋田、福山、浦崎、備後、吉田、峯山、高取、小濱、北越等九ヶ國の分に就いて紹介した。

小野の神に就いて

柴田 實氏

わが國の中世に於いて小野の神の信仰とそれに伴ふ特殊の神話とを持歩いて、之を諸方に流布せしめた小野氏の存在は、早く民俗學者の想定するところであるが、これが文獻的に如何ほどまで確認せられうるものかを、近江の小野神社に就いての史料をもとに吟味しようとした。

國史料春季見學旅行

藤柴田兩先生指導の下に國史專攻學生二十名は、六月三日(土曜日)午前七時五十分京都發の奈良電にて、一泊見學旅行の途に就く。

先づ目下神域擴張作業中の橿原神宮に參拜して、末永雅雄氏から同地の考古學的遺構、遺物に就いて興味深い説明を聞く。新石器時代より降つて、平安時代初期に至る遺物、遺構は、此の土地の特性を如實に物語つてゐるものと云へよう。特に、此の地の纏

紋遺跡が瀧淵地に臨んだ基盤地帯の周縁に存してゐること、或は井戸の中に「神」治等の墨書ある土器を沈めることは今も伊勢地方に於いて同様なことが「マナユ」と稱して行はれつゝあるのと併せ勘へられる事等興味深く感ぜられた。續いて末永氏の案内に依つて久米寺及考古館を一瞥した後、長谷寺に向ふ。

長谷寺にては、本尊十一面觀音、四天王壁畫を拜し、客殿で畫食を認めてから、最近新に岡見正雄氏によつて發見された經覺大僧正自筆の應仁二年連歌新式四幅を見、更に國寶の地藏菩薩立像、不動明王坐像をも拜觀した。寺を辭して、今日甚しい暑氣の中を初瀬驛に引返す。午後二時二十二分初瀬驛發、同三十四分室生口大野驛着、大野寺に向ふ。境内に入れば有名なる彌勒の石佛は宇陀川を隔て、正面にあり／＼と拜まれた。本堂にて、地藏菩薩を拜した後、寺を辭しバスにて溪谷の間を駈ること約二十分、日、尙、高きに、室生の寺門に至る。見るに清秀の處、客殿に暫し憩うて後山内を見學する。三鉛峯を南にして、小徑を東する事、數十歩、石階を北に登れば、即ち、金堂は右正面に、彌勒堂は左横に相對して立つてゐる。まづ彌勒堂に上りて、彌勒の立像を拜す(釋迦坐像は、大阪美術館に寄託中)。次いで金堂に上る。内陣薄暗き處、須彌壇上に、八牀の十二神將の立たる、後に、十一面觀音、文殊菩薩釋迦、藥師の如來を拜した(地藏菩薩は、東京帝室博物館に寄託中)。壁畫、光背畫を見究め等しつゝ、暫くは、古き密教の雲圍氣に没入した。金堂を出で、石階を登り行くに、河鹿の音しきりに風、爽やかであつた。瀧頂堂は現在本堂たり、如意

輪觀音を拜して、堂を立ち出で、北すれば、形よき彼の五重の塔下に至る。奥の院に向はんとて、北西に、小高き所から振り返るに、杉檜鬱蒼として斜陽を受くる壁塔婆がかつきり見えた。一同之より元氣を鼓して、聳立する老樹の間を縫ひ、谷間の石段を數百階攀ぢて、御影堂に至る。小憩して客殿に歸來、夕食を終へて、暮れる空色に瞳をやるに風愈々涼しく一日の疲れを何時しか忘れ

た。
明くれば、朝まだき人々思ひ／＼に、龍穴の社邊り迄を散策、八時前寺門を立ち出で、バスにて驛に向ふ。八時三十四分一路松坂に向つた。

松坂に着きしは、十時二十三分であつた。バスにて直ちに松坂城趾に向つた。宜長翁の舊宅、鈴廻舎は、其の頂きにあつた。鈴廻舎にて翁の遺福遺品等を見、有りし日の翁を偲んだ。歸途翁の誕生地を訪ひ、零時四十六分、電車にて伊勢の神都へ向つた。

山田驛に着きしは、一時五分、先輩の佐藤虎雄氏、中西川康氏、安齋二郎氏の出迎を受け、同氏等に導かれて、外宮、内宮に、參拜し、安齋氏より御社殿の配置、典禮の由來等につき説明を受けた。ついで神宮文庫及び微古館を見學した。神宮文庫に於ては、古文書、稀觀の古寫本等を參觀し、司書北岡四良氏の懇切なる御説明を仰いだ。更らに五六町徒歩して光明寺に行き、光明寺殘齋、軍忠日記、宗廣並宗家の手簡、宗廣公位牌、其の他を見學した。寺を辭せし項には陽光、既に神都の社に傾き初めた。中西氏宅に至り、先輩諸兄に擁せられて晚餐を俱にし、一日の清遊を憶ひつ

ゝ、暫し歡語の中に時を移した。

かくて、二日の見學旅行を終へ、午後七時五十七分の電車にて歸洛の途についた。(毛利・美根・菅田)

後鳥羽天皇七百年記念拜展

恩賜京都博物館に於いては今年、後鳥羽天皇が隱岐に崩御あらせられてより七百年に相當するを記念せむが爲、去る四月十六日より同三十日まで、御物の宸影や新古今集をはじめ、水無瀬神宮に藏せられる御手印の御置文、西本願寺所藏の熊野懷紙等廣く關係の古文書典籍の類を蒐集して一般の拜觀に供した。今、それら出陳品の一々に就いて記すことは出来ないが、就中著しいもの二三を擧ぐれば、まづ三井高公男所藏の建仁元年熊野御幸記は、續群書類説に收められたもの、原本であつて、定家の白筆にかゝり十月五日より同二十七日までの行程を記してゐる。今日熊野懷紙として知られてゐるものは、有名な西本願寺の長卷をはじめ、諸家の秘藏にかゝるものいづれも皆その前年正治二年の御幸の時のものであるが、それらをこの御幸記と共に一所に於いて見ることの出來たのは得難い眼福であつた。次に切續、合點等の問題をめぐつて異論の多い新古今集の諸本が集められたのが注意された。中に就いて東京柳瀬靜夫氏所藏本(重要美術品)はもと野々口隆正の遺本の由であるが頭註に撰者名及び朱の小圈があり、奥に文祿第四乙未曆四月三日授與長師候者也とあり、別に「いまこの新古今集はいにしへ云々」の上皇御跋をそへ、その終に「此新古今與下

後鳥羽院宸翰賦、但尋支類可決僞僞者也、老槐判記之」と記され、所謂隱岐本の原形を傳へるものとして特に注意を惹いた。その他仁和寺藏の後鳥羽天皇御作無常講式、國寶一卷、京都鴨脚光朝氏所藏傳後二條院宸筆八雲抄卷五一帖、東京鳥居大路良平氏所藏遊庭秘抄並に鞠口傳抄各一冊、京都猪熊信男氏所藏古今鍛冶之次第一冊等とりどりに、後鳥羽天皇がわが國文化史上に有し給へる大なる意味を思はしめるものとして興味を覺えた。(柴田)

東洋史談話會

昭和十四年度新專攻生歡迎懇親會 五月八日(月)午後六時より樂友會館に於て開催。先生・先輩・專攻生多數集まり晚餐を共にし、那波・宮崎兩先生より東洋史學の將來及懷舊のお話あり、後歡談に時をうつし、懇親のまことをあく。本年は新專攻生多く盛會であつた。參會者十八名。

第六十五回例會 六月一日(木)午後七時。於樂友會館開催。鷺淵講師を迎へて、昨春探訪せられた遼陽のお話を聞く。參會者十七名。

遼陽の東京城及東京陵

鷺淵講師

遼陽は、滿・鮮・蒙の交渉地として、明以後重要となつた地である。清朝に關していへば、城南に喇嘛園あり、東に太子河を隔て、新城即ち東京城がある。東京城は更にその東北の山中にある。

「東京城」遼陽舊城の東北、太子河を隔て、約三千町(邦尺)の地

點にあり多少歪んだ不等邊四角形をなす。現在は頗廢甚しい。荒廢は早かつたらしい。四方各二門あつたが今は南の太廟門(天祚門)、北門の懷遠門のみ跡を残す。城内に小高い丘あり、礎石散在し、石碑により舊宮殿跡たるを知る。

東京城は清の太祖の萬曆十一年擧兵以來の、寧古塔を始めとする七つの都の中、第六都である。太祖は天命六年遼陽に都を徙したが之は明軍を破つて、南下の勢力の進出であり、遼の遼東經略と同じ意味をもち、太祖に於ける一エボックである。太祖が遼陽に徙つてより一年足らずにして、翌七年東京城を營造し、之に徙つたのは、言はば南下して後の建設的時期に入つた事を意味してゐるものにして、明な記載はないが(一)從來の地遼陽城は、自己の築造にあらず、又從來明の根據地であつたものにして、王者としての權威を發揚するため、又人心一新のため、(二)鮮蒙との關係のために、新城經營を起したものと思はれる。がこゝも三年にして奉天に徙つた。それは明・蒙・鮮に同時に對するには遼陽の地は狹隘に過ぎたからである。それで奉天遷都の際は宮殿等は完成に近かつた、が然し短期間の都なるため未完成であつたらしい。都市計畫はなかつたものらしい。がとに角こゝは太祖の經綸史上、劃期的な意味をもつ土地である。

「東京城」東京城の北方、約二十町の所にある。積慶山(清朝の記録にては揚魯山)の丘陵の西南の一端にあり、太祖の經營にかゝる。清朝太祖時代一族宗室の墓である。天命九年營造であるが、その一部は興慶に移し(順治十一年)現在は舒爾哈齊、肅爾哈

齊、褚英及び穆爾哈齊、達爾察の墓のみある。この中舒哈爾齊は太祖の親弟であり、褚英はその長子でありながら、太祖のため幽死せしめられてゐる。が之も滿洲族統一起上のため、太祖がその經綸の實現には、肉親をも顧みなかつた事を示すと共に、かく統一事業の犠牲になつた一族子弟の墓を東京城近くに、鄭軍盛大に營んだ事に、太祖の性格の一端が伺はれる。

東方文化研究所公開講演

東方文化研究所は、同所講堂に於て、今學期間に左の講演を行つた。來學期の講演、日時、講師、演題等は、追つて發表せられるであらうが、十月には、東京の東方文化學院よりも講師を招いて盛大に行ふといふことである。

四月二十二日(土)後一時半

漢代に於ける家と豪族

研究員 宇都宮清吉氏

(その内容は、本誌前號に論文として發表した)

北魏建國時代の宣撫工策と佛教

囑託員 塚本善隆氏

五月六日(土)後一時半

金藤説話と尙書の今文古文

研究員 平岡武夫氏

金文の時代的研究

研究員 小川茂樹氏

六月三日(土)後一時半

史記曆書に就いて

研究員 能田忠亮氏

兜跋毘沙門について

所長 松本文三郎氏

西洋史讀書會

例會 昭和十四年六月十七日、午後二時より、本年度第二回

例會を開催、時野谷、原兩先生を始め參會者三十餘名。

1' Lohmeyer: Christuskult um Kaiserzeit.

二回生 小田丙午郎君

1' Rudolf Köhlschke und Ebert: Geschichte des

ostdeutschen Kolonisation 小澤吉見君

十二、三世紀と、十七、八世紀との二大隆盛期を経て今日に及ぶドイツ民族の東方植民運動は始めより二つのルートをとつて進出した。即、北東(プロイセンに到る)と南東(ドナウ地帯)の二路である。Herzog, Klostes, Rieker に依つて行はれた初期植民運動は地理的景觀による制約から、この二ルートの運動に及ぼせる影響が重要視せられ、Staatskolonisation となつた近世に於ては民族を背景とする政治勢力の多様性に依つてこのルートの意義が認められた。即、Hohenzollern 家を中心とする北東に於ては單にスラブに對する進出運動であるに對して、Habsburg 家の南東政策はトルコ、マジヤール族等の克服による ungar-österreich 的統合による超民族的大統一國家を實現し、この統治理念に Landpatriotismus が提唱せられた。

地理學談話會

例會 六月十七日午後二時半より地理學堂寶齋室にて

一、武藏國見沼代用水の研究 柴田孝夫君

一、沖繩の様相 長谷部健史君

見沼代用水の研究は前回卒業論文報告の行はれた當時柴田君病中を以て今回之を行ふたもの。

沖繩の様相は旅行談なれども栽培植物の觀察を主とし、園藝植物の栽培に沖繩の財政的困窮打開の一策を求むるに及ぶ。

出席者 小牧教授、室賀講師以下二十四名。

地理教室春季旅行

小牧教授室賀講師野間助手及び二回生四名は六月五日より春季旅行に出發。綾部・舞鶴・橋立・峰山・久美濱・城崎の徑路をとる。鄉村・箱石濱及び玄武洞は視察地の主要なるものであつた。七日京都歸着。

考古學談話會

考古學談話會の第一學期例會は五月十八日午後六時半より樂友會館に於いて開催。梅原、藤原兩助教授を初め二十餘名、折しも入浴中の旅順博物館主事島田貞彦氏も參會せられ盛會であつた。演題及び概要を左に掲げる。

上代文化と歸化人

中野三令氏

我國上代文化の發展は外來文化の模倣攝取に負ふ處大なる事言ふ迄もないが、我が上代人の大陸文化受け入れ方と、それが我國固有の文化と融合發展する徑路の考察に際し、漢・韓歸化人の文化傳播の役割を度外視し得ぬ。文化の進展に及ぼせる歸化人の位置意義價值を考へ、中央集權國家成立過程にあつて、彼等は如何

なる推進力を之に與へたか、逆に斯くして展開せる文化が歸化人に如何に働いたか、之によつて歸化人が心理的に、精神的に如何なる變化を示したかを歴史的・發展的な相のまゝに考察すべきである。

滿洲支那方面雜話

島田貞彦氏

考古學教室に於ける二十年間の思出を述べ、ついで滿洲北支方面に於いて爲された最近の考古學研究の情況を説かれた。

考古學的に見たる漢代生活

岡崎卯一氏

先づ遺物・遺跡を通して支那古代の生活を知る上に漢代は文獻的にも、遺物・遺跡の上にも於いても豊富であるので、これを起點として研究することの妥當なるを説き、其の見解の一環をば衣食住に分けて述べた。衣に於いては大きく三類に分ち、食に於いては農耕具より庖厨・倉庫・食器に及び、住に於いては牀・帳几などに就いて述べ、其の他燈や文房具にも及んで是等の文物發達の依つて來る所の鐵器の使用に負ふのではないかを説いた。

石器時代に於ける北海道文化

松田一政氏

該地方の土器を中心としての各時代文化の考察を行ひ、特に最も古い形式とする住吉式土器の出土状態より、これが北海道へ傳播した系統に就いて論じ、更に圓筒土器・厚手・薄手の縄文土器に就いて金石併用期のオホツク式に至るまでの編年を概説した。

常陸東栗山遺跡の調査

角田文衛氏

今春、三森定男、松田一政兩氏の援助の下に誇掘した筑波郡久賀村東栗山の臺地に於ける石器時代遺跡の概報である。調査の結果

果に依ると該遺跡は十地點にもほる小住居址より構成され、その過半数は貝塚を伴うてゐた。而して出土する土器は地點によつて差があり、茅山式・花楨下層式・阿玉臺式・勝坂式・加曾利E式・堀之内舊型式・堀之内新型式・加曾利B式・安行式等の各樣式に屬する土器が存在する。この點からすると石器時代の初期より末期に至るまでこの臺地に於いて連續の生活の営みが續けられたと見られる。かくて本臺地の遺跡は關東地方の石器時代文化研究に於ける一の單位として重要な位置を占めるものと謂ひ得べきことを説述した。

産土山古墳の調査

梅原助教撰

京都府の北端、竹野郡竹野町字宮ノ越の産土山古墳は日本海に直面し、その潮風の強く當る疏松の生えた、可成り高い丘の頂に在る。昨年初夏偶然石棺が掘り當てられて後正規の手續を終へ此の四月八日から内部の發掘が行はれた。

古墳の附近には膨大な前方後圓墳である祈明山古墳を初めとして多數の古墳が散在し、この産土山古墳の直下には横穴式石室の一つが暴露し、又産土山古墳のそれと同型式の長持型石棺の發見例も二三にとゞまらないのである。

掘て墳の主體たる石棺はごく地表より淺い位置に埋藏してあつて長持型に屬し、その典型的な且つ優れたもの、一つである。蓋には把手が前後左右に各二つづつ、外周をすべて粘土で包んでゐる。

棺内は一面朱に染まつてそのうちに伸展葬の遺骸が半ば存し

棺の感を與へた。遺物は被葬者の丁度頭の位置に墳輪と同一の燒よりなる枕(この中には頭髮を遺存してゐた)、頭側には鹿角製製の短劍・櫛・仿製鏡一面、が左右に存し又玉類則ち白玉・管玉・小玉の多數も左右からその質の違つたものが見出されて木來玉を佩用してゐた形に於て埋葬されてゐなかつたことを推さしめた。更に腰部左右長刀と、長さ約四尺の弓、後者はにぎりの位置に櫻の皮を巻いて。足部には櫛と環頭刀子があつた。棺外からその頭部に兜、短甲を出土した、棺外右側(外頭部より見て)棺底から約三尺の位置に於いて鐵鎌・鐵刀・櫛を發見したが此の附近は粘土固く、それが鐵鏝と一塊となつて出土したのである、棺外副葬品の此等の状態は、則ちこの部分まで棺を造作し、然る後埋葬を行ひ副葬品を並置して再びその上に封土をかぶせた事を意味するのであらう。又盛土は地盤よりすべて築成したもので、それは即ち道路開鑿のためけつりとられた古墳の腹部が露出して地山の層とその上に盛られた封土の層とを明瞭に示してゐるのである、尙此の古墳の表面には河原石を葺き周圍には墳輪をめぐらしてゐた。要するに此の古墳は右の調査から遺骸埋葬の實際に對して確實な一資料を提供したものであつてこれに依つて少くも此の棺では遺骸をば直ちに棺内に置いたことが知られるわけであり、また副葬品中木弓なり刀裝具鞘等の原形をなしたのも珍らしい例とする云々。

大阪府下石器時代遺跡見學旅行

五月二十七、八兩日考古學の春期旅行といふ意味で梅原助教指導のもとに副手藤岡、大學院鈞田、岡崎、學生麗田の五名は大坂府下の主要な石器時代遺跡地を見聞した。兩日は生憎地方に文學部學友會の旅行があつた爲に參加者は少なかつたが五月の晴天に恵まれて楽しい二日を送る事が出来た。

第一日は先づ阪和の濱寺で下車、かつての新開界の巨屋で、爾も考古學界に理解をもち、種々の業績をのこされた故本山彦一翁の蒐集品を集めた富民協會農藝博物館内の本山考古室を見學した。こゝには翁が巨額の費用と人知れぬ苦心の結晶である所の石器時代を中心とした多くの貴重な資料が陳列されてある。就中青森縣是川の泥炭地から出た遺物特に木製品や有機物類や大正の前半に學界に大センセーションをおこした河内國府石器時代の諸遺物がユニークなものとして處狭き迄に置かれてあるのに、我々の心は躍らされた。これと共に此の考古室には原史以後の遺物も多くそのうちに興味を惹くものも多い。梅原助教はそれ等の中から壹形鏡や直弧文のある鹿角叉裝具、文様ある文類、石杖等指摘して一同是等の撮影實測に従ふた。かくて第一日の大半はこの奥ゆかしい濱寺の本山考古室で過したのであつた。午後三時過ぎ堺市に出て、東郊の史前遺跡を探る。堺中學の西側、所謂三國ヶ丘のそこでは人家の間から彌生式器片、土師器片、サスカイトの剝片を採集した。この地は標高十米を僅かにすぎないが前面海を見下ろす斜面の好地點である。堺市を歩いてみるとかつての港の町、堺の姿が町々に見逃がせない。アスマアルトに午後六時太陽が

反射する。古いこの町人の都市の眞中で、半生を土器古瓦等の蒐集にさへげてゐる前田長三郎氏を訪れる。梅原助教とは永い間の知り合ひの人だ。こゝで我々は文字瓦を含んだ多くの畿内の古瓦を見ると共に、今度の主な目的の畿内石器時代の石鏃・石槌等の絲にくくられてあるのに注意した。また土器類もあつて、その中に現大和川下流の砂層工事に多く發見されたタコ壺土器の多數採集されてゐるのを注意した。これは四ツ池遺跡其他の出土品と共に和泉の彌生式文化の一特異な姿を示すものである。第一日の見學はこれで打切りとなつた。堺市の郊外には古墳文化の象徴として、おそれ多くも仁徳天皇の大仙陵を始め、履仲・反正兩天皇陵が今なほ嚴然とそゝり出てゐるのに眼をくばつた。電車で大阪の町へと急いだ。

第二日は大鐵で南河内の上の太子まで乗る。車が進むと共に埋もれたデルタ上にのびゆく工業都市大阪と次々々に遠ざかつてゆく。道明寺附近に來れば田舎だ。上の太子から喜志或は壹井の源氏發祥地へ越える峠あたり切石で作つた珍らし石室を主體とした御嶺山古墳附近の史前遺跡で先づ蒐集を始める。この丘陵の上からは石川の平野が見える。こゝでもサスカイトの剝片に彌生式土師器片を採集。やがて喜志に出た。

小學校でもとの林校長が丹念に集めて置かれた石鏃石槌大形打製石器類數百點を見てから遺跡地へ蒐集に出た。この遺跡の事は教室の報告書第二冊に記されてあるが遺物の數、種類は、その後お百姓が集めたりして、頗る豊富になつた。土器片、サスカイト

片の分布區域の數町歩に互つてゐるこの遺跡地に立つて、我々は畿内の石器の原料を産出する貴い山、二上山の雄姿を心ゆくまで仰ぎ見た。午後は道明寺に出て土師神社神官の南坊城氏を訪ふて其の所藏品を見學する。こゝでは國府遺跡出土品を中心に多くのものを得た。石川が大和川の本流と合する地點、この國府のあたりから大阪平野のデルタは構成されるのである。時間の關係で電車の中から、その國府の附近——我が考古學教室の最初の科學的報告が出来上つた地點、貴重な人骨の出た處をば感慨をもつて眺め乍ら次の目的地に向ふ。生駒山脈に並行して電車は走る。恩智で下車して、その史前の遺跡を訪ねた。これは既に報告された所ではあるが、こゝにでも數町歩に互る廣い彌生式土器の櫛目紋のある片や、サスカイトが散布してゐて他日の臺地上に發掘調査を待ち受けてゐる様であつた。一巡した頃には早くも第二日の夕の陽は攝津山に没してしまつた。

會 報

◇會 員 動 靜

◇入 會

京都市左京區吉田神樂岡町五 竹内方 淺井一郎氏

(稻葉慶信氏紹介)

東東市中野區高根町六 三上次男氏

東東市中野區樂町通一ノ一 鈴木俊氏
(右二氏 外山軍治氏紹介)

京都市上京區烏丸通寺ノ内上ル東 河池貫一氏

神戸市葺合區野崎通二丁目五三ノ三 秦密氏

神戸市灘區高羽住田縣公舎六號 堀川侃氏

(右三氏 鸛淵一氏紹介)

滋賀縣長濱町 長濱小學校 中村林一氏
(小林行雄氏紹介)

京都市左京區北白川上終町九八 磯谷方 廣海浩三氏
(梅原末治氏紹介)

京都市左京區田中高原町四九 中村方 戸川俊正氏

京都市左京區北白川上終町三一 森方 織田昭磨氏

京都市左京區北白川下池田町五三 西村方 渡部是氏

京都市左京區北白川西町七三 澤田方 北原一敏氏

京都市左京區聖護院中町九 福本方 高橋良夫氏

京都市左京區淨土寺馬場町二二 小林方 殿界美房氏

大津市膳所中庄町三〇 居 平岡守衛氏

◇轉 居 今中寛司氏

兵庫縣立姫路中學校 鏡山猛氏

福岡市馬出三角町六九九 堀井經夫氏

京都市麴町區麴町一丁目八ノ三 三國谷宏氏

京都市神田區駿河臺二丁目一ノ一 東亞研究所内 大島利一氏

北京西城西四牌樓官門口葡萄園二八號 藤井方 日比野丈夫氏

同 右

◇寄贈交換圖書目錄 (六月現在)

史學會編 本邦史學史論叢	史 學 會	皇 學	六ノ三	神宮皇學館
史學會編 東西交涉史論	史 學 會	中國文學月報	四九	中國文學研究所
佐伯啓造編 藥師寺の新研究	史 學 會	蒙 古	三	善隣協會
アルタン・トブチ(蒙古年代記)	鶴 故 郷 會	歷史學研究	九ノ三	歷史學研究所
史 學 雜 誌	外務省調査部	京城帝大史學會誌	十四	京城大史學會
歴 史 地 理	史 學 會	軍事史研究	四ノ三	軍事史學會
社會經濟史學	日本歴史地理學會	哲學研究	二四ノ四・五・六	京都哲學會
史 學 研 究	社會經濟史學會	紀州文化研究	三ノ四	紀州文化研究所
人類學雜誌	廣島史學研究所	法經學論叢	七	北大法經會
考古學雜誌	東京人類學會	勢 陽 論 叢	二	神宮皇學館
文 化	考 古 學 會	駒澤地歴學會誌	二	駒澤大學地歴學會
國學院雜誌	東北大文科會	基督教史研究	四	基督教史研究所
史迹と美術	國學院大學	北方文化研究報告	一	北大北方文化研究室
社會學徒	史迹美術同致會	古 學 叢 刊	一・二	北京古學院
和 紙 研 究	社會學徒社	Harvard Journal of Asiatic Studies.	4-1	Harvard-Yenching Institute.
史 學	三田史學會			
龍谷史壇	龍谷大學			
臺大文學	臺大文學會			
國民精神文化	國民精神文化研究所			
無 閑 之	むかしの會			
民族學研究	日本民族學會			